

(3)

定理 (超重要) 次元について $\vec{a}_1, \dots, \vec{a}_l \in \mathbb{R}^n$ とする. $l > n$ ならば

(1)

$\vec{a}_1, \dots, \vec{a}_l$ は LD. (nが小さいと示しやすい)

証明は読者にと(実質的には示していいです.)

(証明用) (i) $\vec{a}_1, \dots, \vec{a}_n$ が LD かつ $\vec{a}_1, \dots, \vec{a}_n, \dots, \vec{a}_l$ は LD.

(ii) $\vec{a}_1, \dots, \vec{a}_n$ が LI かつ

$$(\vec{a}_1 \dots \vec{a}_n) \rightarrow \dots \rightarrow (\vec{e}_1 \dots \vec{e}_n) = I_n$$

とすると $\vec{a}_{n+1} = a$ とする

$$(\vec{a}_1 \dots \vec{a}_n \mid \vec{a}_{n+1}) \rightarrow \dots \rightarrow (I_n \mid \vec{c})$$

とすると $\vec{c} = c_1 \vec{e}_1 + \dots + c_n \vec{e}_n$ かつ $\vec{a}_{n+1} = c_1 \vec{a}_1 + \dots + c_n \vec{a}_n$ がいえる.

(1.1) $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_m \in \mathbb{R}^n$ とする. $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l \in L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_m)$ とする.

$l > m$ ならば $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l$ は LD. (対偶: $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l$ が LI ならば $l \leq m$)

証明用 $(\vec{q}_1 \dots \vec{q}_l) = (\vec{p}_1 \dots \vec{p}_m) (\vec{c}_1 \dots \vec{c}_l)$

$\Sigma \equiv \vec{p}_1 \dots \vec{p}_m$ とし $\vec{c}_j \in \mathbb{R}^m$ かつ $\vec{c}_j \neq \vec{0}$ とする. 定理から $\exists \vec{v} (\neq \vec{0}) \in \mathbb{R}^l$

$$(\vec{c}_1 \dots \vec{c}_l) \vec{v} = \vec{0} = a \text{ とする}$$

$$\begin{aligned} (\vec{q}_1 \dots \vec{q}_l) \vec{v} &= (\vec{p}_1 \dots \vec{p}_m) (\vec{c}_1 \dots \vec{c}_l) \vec{v} \\ &= (\vec{p}_1 \dots \vec{p}_m) \vec{0} = \vec{0} \end{aligned}$$

から $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l$ が LD であることが分かる.

n = 1 のとき 1次元内では $\Sigma = 1$ と示すことができる. (1) である.

(4)

$\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_m$ と $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l$

$\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_m, \vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l \in \mathbb{R}^n$ かつ $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_m$ と $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l$ は $\mathbb{R}^n$ の基底である (2)

とす

$$i) \vec{p}_1, \dots, \vec{p}_m \text{ は LI}$$

$$ii) \vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l \text{ は LI}$$

$$iii) L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_m) = L(\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l)$$

$$\Rightarrow m = l.$$

基底 $\mathbb{R}^n$ の部分空間 V かつ $V \neq \{\vec{0}\}$ とする。

$\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l \in V$ かつ V の基底とは

$$i) V = L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l)$$

$$ii) \vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l \text{ は LI}$$

と定義する。

系 0.1 $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l$ かつ V の基底, $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_m$ かつ V の基底

ならば $l = m$ かつ $\vec{p}_i = \vec{q}_i$ である。

$V \subset \mathbb{R}^n$ かつ V の部分空間とは

$$\vec{x}, \vec{y} \in V \Rightarrow \lambda \vec{x} + \mu \vec{y} \in V$$

($\lambda, \mu \in \mathbb{R}$)

基底の存在. V が K^n の部分空間内では, $V \neq \{\vec{0}\}$ といふ.

⑤

③

そこで $V = \{\vec{0}\}$ は基底が存在しない.

i) $V \neq \{\vec{0}\}$ のとき $\exists \vec{p}_1 \in V, \vec{p}_1 \neq \vec{0}$

ii a) $V = L(\vec{p}_1)$ ならば $\vec{p}_1$ が基底.

ii b) $V \neq L(\vec{p}_1)$ ならば $V \supsetneq L(\vec{p}_1)$ なる $\exists \vec{p}_2 \in V, \vec{p}_2 \notin L(\vec{p}_1)$
(= a.e. $\vec{p}_1, \vec{p}_2$ は LI)

iii a) $V = L(\vec{p}_1, \vec{p}_2)$ ならば $\vec{p}_1, \vec{p}_2$ は V の基底

iii b) $V \neq L(\vec{p}_1, \vec{p}_2)$ ならば $V \supsetneq L(\vec{p}_1, \vec{p}_2)$ なる $\exists \vec{p}_3 \in V, \vec{p}_3 \notin L(\vec{p}_1, \vec{p}_2)$
(= a.e. $\vec{p}_1, \vec{p}_2, \vec{p}_3$ は LI)

ii c)

$V \neq L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_{l-1})$ ならば $V \supsetneq L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_{l-1})$ なる

(= a.e. $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_{l-1}$ は LI)

$\exists \vec{p}_l \in V, \vec{p}_l \notin L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_{l-1})$

ii+1, a) $V = L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l)$ ならば $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l$ は V の基底

ii+1, b) $V \neq L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l)$ ならば $V \supsetneq L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l)$ なる

$\exists \vec{p}_{l+1} \in V, \vec{p}_{l+1} \notin L(\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l)$ (= a.e. $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_{l+1}$ は LI)

⋮

これは ∞ まで繰り返すか?

結論 $V \neq \{\vec{0}\}$ ならば $\exists$ K^n の部分空間内には l 個の基底 $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l$

が存在するから l は V の次元である.

$$\dim V = l$$

と l である. V の基底は l

以下の定理は今以後 時々使います。

dim V の値 = 0 といえます。

(A0 x 2 → -2: 何處でも使います)

定理

$V, W (\subset K^n)$ が異なる 線性独立基底をそれぞれ持つとき、
空内といえます。

空内といえます。

$$(i) \quad V \subset W \Rightarrow \dim V \leq \dim W$$

$$(ii) \quad V \subset W \text{ かつ } \dim V = \dim W \Rightarrow V = W$$

(i) V の基底 $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l$, W の基底 $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_m$ といえます。

$$\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l \text{ は LI かつ } \vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l \in L(\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_m)$$

から $l \leq m$ が従います。これは $\dim V \leq \dim W$ を意味します。

(ii) V の基底 $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_l$, W の基底 $\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l$ といえます。

$$V \subsetneq W \text{ ならば } \exists \vec{p}_{l+1} \in W, \vec{p}_{l+1} \notin V \text{ となる}$$

$$\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_{l+1} \text{ は LI. かつ } \vec{p}_1, \dots, \vec{p}_{l+1} \in L(\vec{q}_1, \dots, \vec{q}_l)$$

から $\vec{p}_1, \dots, \vec{p}_{l+1}$ は LI となることになります。従って $V = W$